相模経済新聞　2019年3月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

11

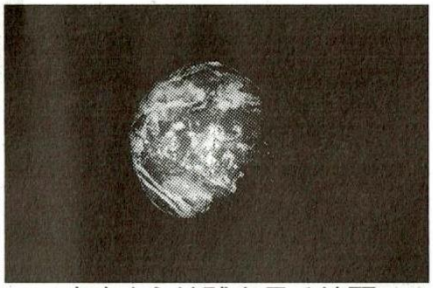
北里環境科学センター
理事長／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

8年目の福島第一原発事故

あれから既に8年が過ぎた。あの大津波を、世界の人々は、テレビの画面でつぶさに観た。伝説や歴史上の出来事、あるいは海外のニュースとして捉えていたものが、身近な現実のものとして、茶の間に怒涛のように流れ込んだ。それに伴って起こった福島第一原子力発電所の事故が、桁違いに深刻な問題を社会に残した。地球上が固唾を呑んで見守る中で、福島第一原発は水蒸気爆発の危機に瀕していた。ニュース画面で、「水蒸気」という言葉が流れた直後、日本国中から外国人観光客、在留外国人の家族、大半の留学生が、あっという間に日本を後にした。

福島の原発が水蒸気爆発を起こせば、東京都を含む関東地方一帯も壊滅的な被害を受ける。水素爆発に比べて水蒸気爆発は、条件次第で数百万倍の爆発力を生じる。その後の報道番組で、事故現場で指揮をとっていた故吉田昌郎所長が、急上昇する圧力計を見ながら呻くように「万事窮しました」といった場面が忘れられない。水蒸気爆発に至らなかったのは単なる偶然で、原子炉の脆弱な部分から高圧蒸気が漏れて、大爆発に至らなかったのだ。

表向きは大事に至らず、立入禁止区域を設定することで当時の緊迫した危機感は潮が引くように収まり、留学生は復帰し、今や日本中が外国人旅行者で史上最高の賑わいを見せている。世の中は2020年の東京オリンピック一色で、華やいだ空気が満ち溢れている。



宇宙から地球を見る練習
（サイエンスカフェ・コスモスの夜）

事故を起こした福島第一原発の本体は、その危機的状況は全く変わっていない。1～3号機の炉心はメルトダウンしたまま、炉の底には人が近づくと即死してしまう程の高濃度の人工放射性核種がくすぶり続けている。高性能ロボットでも炉心に近づくと計器は破損してしまい、使い物にならなかった。仮に、遠隔操作で核のゴミを取り出しても、運ぶ先は決まっていない。汚染水は溜まる一方で、廃炉作業の具体的な行程は、8年過ぎた現在でも全く見通せない。世界中の富を積み上げても、この事態が好転することはない。

宇宙から地球を見ると、そこには、38億年の年月を経て青く輝く高次元環境生命体が息づいている。この眩い生命体の数百カ所で、人智の力が及ばない核の破壊が進んでいる。福島第一原発の事故を経験した人類は、新しい哲学「宇宙生命哲学」を必要としているのではないか。

次回は、先月お約束した「スペース・フォース」について、考察する。